

第五十回中央教化研究会議 基調講演

日蓮聖人の仏陀観と日蓮正宗の日蓮本仏論

庵谷行亨

一 はじめに

本日、お話しさせていただくことの要点は二です。一は日蓮聖人はどのように仏陀釈尊を受け止めておられたかということです。日蓮聖人のご遺文をとおしてその概要を見ていきたいと思えます。日蓮聖人は、釈尊のことを教主釈尊・世尊・大覺世尊・仏・仏陀・寿量品の仏・如来・釈迦・釈迦仏・釈迦如来・釈迦牟尼仏・釈迦文・釈迦仏法華經・本師・古仏などと呼称されています。それぞれの呼び方には文脈上における日蓮聖人のお気持ちが表示されています。それらは日蓮聖人の仏陀観を示す一例でもあります。二は日蓮正宗の立場から見た日蓮正宗の日蓮本仏論の要点の紹介です。同じ日蓮聖人系の題目教団でありながら、日蓮正宗は他の題目教団とは異なる教義を立てています。とくに日蓮聖人についての受け止め方が著しく異なります。この点について概要をご紹介させていただきます。

二 宗学の意義

最初に「宗学の意義」について触れさせていただきます。このようなことを申し上げるのは、日蓮聖人の教えを奉

持する者の基本的姿勢について確認しておきたいと考えるからです。日蓮聖人の教えを信受する者はどのように日蓮聖人にまみえるべきか、日蓮聖人の教えに生きるとはどのようなことなのか、ということについて確認することが、本日のテーマについて考える基本にあると思うからです。

ここでいう「宗学」とは、単に学問としての宗学ではなく「日蓮聖人の教えに生きる者」という意味を込めています。

（一）宗学の本質

宗学の本質は、宗祖の教えに帰入し信仰を通して正しい人生を歩むことにあります。

（二）人間と宗学

宗学は、宗祖の教えに本来の自分を知り、宗祖の教えに自己を実現することです。すなわち宗祖の教えに自身を見出し自身を完結することです。

（三）社会と宗学

宗学は、宗祖の教えに、生きることの意義を知り、社会的使命を全うすることです。人は社会の中で生活しています。人が生きることが、社会と共に生きることです。そこで、日蓮聖人の教えに生きる者としての自覚を持ち社会的使命を全うすることが大切になります。

三 日蓮聖人の仏陀観

（一）本門の教主釈尊

日蓮聖人が信仰された究極の仏陀は本門の教主釈尊です。その本門の教主釈尊を日蓮聖人はどのように受け止めておられたかについて、日蓮聖人のご文章に添って紹介させていただきます。

1 発迹顕本の仏

①『開目抄』には次のようにあります。

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。『昭定』五五二頁。

この文は日蓮聖人の仏教観に立脚して叙述されています。日蓮聖人は釈尊ご一代の仏教を爾前・迹門・本門の三点に区分して受け止めておられました。ここでは、爾前には一念三千不説・二乗不作仏と始成正覚の二失があり、迹門は一念三千・二乗作仏を説いてそのうちの一失を免れたとされています。ところが迹門は発迹顕本していないために真の一念三千もあらわれず二乗作仏も定まらないとし、本門において初めて真の因果・十界互具・百界千如・一念三千が成り立つとされています。すなわち本門の発迹顕本において仏陀釈尊の真実義が成就するとの教示です。日蓮聖人の仏陀観の基本は本門の開顕にあるということが分かります。

ところで、日蓮聖人は釈尊ご一代の仏教を爾前・迹門・本門の三点に区分して受け止めておられたと申しましたが、それは一面的な教相上の見方です。日蓮聖人は本門にさらに本門を見ておられます。三大秘法の本門がそれです。その場合の本門は迹門・本門の相対を超えた本門ということになります。教学上、観心本門と称される概念です。

②『御衣並単衣御書』には次のようにあります。

此仏は再生敗種を心腑とし、顕本遠寿其寿とし、常住仏性を咽喉とし、一乗妙行を眼目とせる仏なり。『昭定』

③『諫曉八幡抄』には次のようにあります。

日本六十六箇国二の島、一万一千三十七の寺寺の仏は皆或は画像或は木像、或は真言已前の寺もあり、或は已後の寺もあり。此等の仏は皆法華経より出生せり。法華経をもつて眼とすべし。所謂、此方等経は諸仏眼等「云云」。妙楽云然此経以常住仏性を咽喉以一乘妙行為眼目以再生敗種為心腑以顕本遠寿為其命等「云云」。『昭定』一八四一頁。

②と③には妙楽大師の『法華文句記』からの引用が見られます。「再生敗種」は蘇生・治癒（能治）の義、「顕本遠寿」は顕本・久寿（久遠実成の開顕）の義、「常住仏性」は本種・久種（久遠仏種）の義、「一乘妙行」は法華妙行（受持信行）の義を表しています。これらは法華経本門の開顕に立脚した法門であることから、日蓮聖人の仏陀観の中心が本門の開顕にあることが理解されます。

2 仏の三身顕本

①『開目抄』には次のようにあります。

本門十四品も涌出・寿量の二品を除ては皆始成を存せり。双林最後大般涅槃経四十卷・其外の法華前後の諸大乘経に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乘経をばすて、但涌出・寿量の二品には付べき。『昭定』五五三頁。

法華経本門の中でも、弟子（地涌菩薩）の久遠教化を明かした涌出品と仏陀釈尊の久遠実成を開顕した寿量品の二品以外は「皆始成を存す」と厳しい分別を立て、諸大乘経は「法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず」とされています。法身は真理身ですので無始無終であることは諸大乘経の通説です。ところが応身報身の顕本は法華経の寿量品に限られます。法華経の寿量品では始成の釈尊に即して久遠実成の仏が開顕されます。このように仏の三身顕本を説くことは法華経の寿量品に限られます。

三身顕本は天台教学に説かれています。日蓮聖人は天台教学に立脚して、法華経本門の仏陀釈尊を三身即一正在報身の仏と受け止められたのです。

3 三身円満の古仏

①『開目抄』には次のようにあります。

大日経・金剛頂経等の八葉九尊・三十七尊等、大日如来の化身とわみゆれども、其化身、三身円満の古仏にあらず。大品経の千仏・阿弥陀経の六方諸仏、いまだ来集の仏にあらず。大集経の来集の仏、又分身ならず。金光明経の四方四仏化身なり。総て一切経の中に各修各行の三身円満の諸仏を集て我分身とわとかれず。これ寿命品の遠序なり。『昭定』五七一〜五七二頁。

ここでは、諸大乘経に説くところの分身諸仏はそれぞれの教主の化身ではあっても「三身円満の古仏にあらず」とされています。諸大乘経では分身諸仏を説くが、それらはいずれも三身円満の古仏ではないとの教示です。その叙述には法華経の寿命品の仏のみが三身円満の古仏であるとの意図が含まれています。

4 所顕三身無始の古仏

①『観心本尊抄』には次のようにあります。

寿命品云然我実成仏已来無量无边百千万億那由他劫等〔云云〕。我等已心釈尊五百塵点乃至所顕三身無始古仏也。『昭定』七一二頁。

「所顕三身無始古仏」とは久遠実成を開顕された三身相即の仏という意味です。「古仏」とはここでは久遠実成の仏を指します。

「古仏」という言葉には種々の意味があります。基本的には過去に出現した仏という意味です。法華経にも今番出世の釈尊以前の仏が説かれています。これらの過去仏を古仏とも称します。

ここでは諸大乘経所説の諸仏が始成正覚であるに對して、法華経寿量品の久遠実成の仏を「古仏」と表現されたものです。

5 寿量品の仏

①『開目抄』には次のようにあります。

華嚴経の台上十方・阿含経の小釈迦、方等・般若の、金光明経の、阿弥陀経の、大日経等の権仏等は、此寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の学者等近は自宗に迷、遠は法華経の寿量品をしらず、水中の月に実月の想をなし、或は入て取んともひ或は繩をつけてつなぎとどめんとす。天台云不識天月但觀池月等「云云」。『昭定』五五二頁。

天台大師の『法華玄義』の文を引いて、法華経寿量品の仏を「天月」「実月」、諸大乘経の仏を池月（「水月」）に比し、諸宗諸師の誤謬を指摘されています。

②『開目抄』には次のようにあります。

妙楽云一代教中未曾顕遠父母之寿。○若不知父寿之遠復迷父統之邦。徒謂才能全非人子等「云云」。妙楽大師は唐の末天宝年中の者也。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗、並に依経を深み、広勸て、寿量品の仏をしらざる者父統の邦に迷る才能ある畜生とかけるなり。『昭定』五七八頁。

妙楽大師は『法華五百問論』に「寿量品の仏をしらざる者」は父の国に迷う「畜生」であるとされています。寿量品の仏は主師親三徳の教主であることから一切衆生の父でもあります。したがって「寿量品の仏をしらざる者」とは父を知らない不孝者ということになります。親の恩を認識しないゆえに「畜生」となります。

③『断簡新加二三一』には次のようにあります。

答云月支・漢土・日本国の二千二百三十余年が間の寺塔を見るに、いまだ寿量品の仏を造立せる伽藍なし、清舎

なし。『昭定』二九三八頁。

月支・漢土・日本国の三国において「いまだ寿量品の仏を造立せる伽藍なし、清舎なし」とあります。寿量品の仏を本尊として祀っている寺院がない、との意です。三大秘法の一として教示される本門の本尊は寿量品の仏であることが分かります。「造立」とありますので、紙面に図顕された大曼荼羅だけが本尊ではないことが分かります。このことは『観心本尊抄』にも「権大乘並涅槃・法華経迹門等釈尊以文殊普賢等为脇士。此等仏造画正像未有寿量仏。来入末法始此仏像可令出現歟。」(『昭定』七二三頁)とあることから理解されます。

6 本門の教主釈尊

① 『観心本尊抄』には次のようにあります。

此時地涌千界出現本門釈尊為脇士一閻浮提第一本尊可立此国。『昭定』七二〇頁。

「この時、地涌千界出現して本門の釈尊の脇士となりて、一閻浮提第一の本尊、この国に立つべし」と読み下します。釈尊の脇士となる「地涌千界」は本化四菩薩ですので、一尊四士本尊の教示とされます。

② 『報恩抄』には次のようにあります。

一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。『昭定』一二四八頁。

「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とあり、その説明として「宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし」とあります。本尊は「本門の教主釈尊」であり、その相貌は一塔兩尊四士としても顕されることを意味しています。いずれにしても日蓮聖人は、本門の教主釈尊を本門の本尊とされていることが分かります。本門の教主釈尊とは前掲のとおり、寿量品の仏のことです。

7 本門の本尊

① 『観心本尊抄』には次のようにあります。

像法中末観音薬王示現南岳天台等出現以迹門為面以本門為裏百界千如一念三千尽其義。但論理具事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊未広行之。所詮有円機無円時故也。『昭定』七一九頁。

像法時の中末には南岳大師・天台大師等が出現して、迹面本裏の法華仏教をもって一念三千の教えを弘めたが、それは理具を論じたのであって、事行の南無妙法蓮華經の五字と本門の本尊はいまだに広く行じられていない、とあります。末法時は本面迹裏の法華仏教によって、本門一念三千の教えである事行の南無妙法蓮華經の五字と本門の本尊が広く行じられるべき時です。事行の法門である本門の題目・本門の本尊は広く社会に実現されるべき教えであることが分かります。

② 『顕仏未來記』には次のようにあります。

此人得守護之力以本門本尊・妙法蓮華經五字令広宣布於閻浮提歟。例如威音王仏像法之時不輕菩薩以我深敬等二十四字広宣布於彼土招一國杖木等大難也。彼二十四字与此五字其語雖殊其意同之。彼像法末与是末法初全同。彼不輕菩薩初隨喜人日蓮名字凡夫也。『昭定』七三九頁。

法華經の行者は地涌菩薩の守護力を得て、本門本尊・妙法蓮華經五字を閻浮提に広宣布するであろうと述べ、威音王仏の像法末の二十四字と釈迦仏の末法初の五字との共通性を指摘することによって、自らの値難弘教の正当性を示されています。法華經の行者である自身による本門本尊・本門題目の広宣布の確信を吐露されたものといえますよう。

③ 『法華行者値難事』には次のようにあります。

天台・伝教宣之本門本尊与四菩薩戒壇南無妙法蓮華經五字残之。所詮一仏不授与故二時機未熟故也。『昭定』七

天台大師と伝教大師がまだ弘めなかった本門本尊・戒壇・南無妙法蓮華經五字について述べられています。三大秘法の名称が揃って示されたのは現在知られている遺文中最初です。三大秘法を天台大師と伝教大師がまだ弘めなかった理由として授与と時機が指摘されています。末法は法華經虚空会において別付属を蒙った本化地涌菩薩が邪智謗法の機に結要の法である題目を弘める時であるとの意図が秘められています。

④ 『法華取要抄』には次のようにあります。

問云如来滅後二千余年龍樹・天親・天台・伝教所殘秘法何物乎。答曰本門本尊与戒壇与題目五字也。『昭定』八一五頁。

龍樹・天親・天台・伝教未弘の秘法として「本門本尊与戒壇与題目五字」があげられています。法華經の先師がまだ弘めなかったという前置きのうえに三大秘法をあげられていることは前掲の『法華行者値難事』と同じです。類似した用例は『観心本尊抄』（『昭定』七一―九頁）や『報恩抄』（『昭定』一二―四八頁）などにも見られます。

このように日蓮聖人は寿量品で開顕された仏を本門の本尊とされています。

8 本門寿量品の本尊

① 『観心本尊抄』には次のようにあります。

本門寿量品本尊並四大菩薩三國王臣俱未崇重之由申之。此事粗雖聞之前代未聞故驚動耳目迷惑心意。『昭定』七一―三頁。

本門寿量品で開顕された仏を「本門寿量品本尊」と表現されています。寿量品の仏・本門の教主釈尊こそが本門の本尊であることが明確に示されています。

以上のとおり、日蓮聖人は法華經本門寿量品の仏陀釈尊を、発迹顕本の仏・三身顕本の仏・三身円満の古仏・所顕

三身円満の古仏・寿量品の仏・本門の教主釈尊・本門の本尊・本門寿量品の本尊等と表現されていることが分かります。

(二) 『開目抄』の相對

『開目抄』の五重相對の第五重は教觀相對と稱されています。『開目抄』の本文は次の通りです。

一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。『昭定』五三九頁。

本門の教相は本門寿量品の文上の經說で一品二半・寿量品です。本門の觀心は本門寿量品の文底の經意で内証の寿量品・題目五字七字となります。本門の教相と本門の觀心は末法の大法である題目五字七字を詮顯するための相對であることから、大法詮顯の暁には教觀は相即して不二となります。一品二半・寿量品と内証の寿量品・題目五字七字との間に優劣はありません。

(三) 『觀心本尊抄』の三段

『觀心本尊抄』の四種三段の第五重は本法三段と稱されています。『觀心本尊抄』の本文は次の通りです。

また本門において序・正・流通あり。過去大通仏の法華經より、乃至現在の華嚴經、乃至迹門十四品、涅槃經等の一代五十余年の諸經、十方三世の諸仏の微塵の経々は、皆寿量の序分なり。『昭定』七三四頁。原漢文。

十方三世諸仏微塵の経々は序分、寿量（一品二半・妙法五字）は正宗分です。流通分は説かれていませんが、南無妙法蓮華經と解釈されています。正宗分である本法は「寿量」とありますが、教相的には一品二半、觀心的には題目と表現できます。

さらに『觀心本尊抄』には次のようにあります。

本門は序・正・流通ともに末法の始を以て詮となす。在世の本門と末法の初は、一同に純円なり。ただし彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり。『昭定』七二五頁。原漢文。

この文は末法の大法（題目五字七字）を詮顯するために、在末を相望して種脱を対判したものです。すなわち在世本門は一品二半にして脱益、末法の初は題目五字にして下種となります。在世と末法という時代、本門一品二半と題目五字という教法、脱益と下種という利益の相異はありますが法門としては「一同に純円」です。在世の衆生は本門一品二半の教えによつて解脱の益を得、末法の衆生は題目五字の大法によつて下種の利益を得ます。

(四) 末法の種脱

末法の種脱は次のように考えられています。末法時は題目五字七字の下種によつて利益を得ます。得益の内容は久遠釈尊の因果の功德です。題目五字（教）は仏種であり本因本果であり、寿命品の肝心・要法・良薬・宝珠とも表現されます。題目七字（観）は下種となります。これは題目受持の信行ですので唱題・立正・色説を意味します。下種は即脱益です。『観心本尊抄』の説示にしたがえば受持は自然讓与となります。受持即讓与を種脱一双と称します。受持の信に因果の功德が自然に讓与されるからです。

(五) 教観相即

教観相即とは教と観が相即していることを言います。本門の教は題目五字、本門の観は題目七字です。教は観に即した教（即観の教）、観は教に即した観（即教の観）ですので教観は相即しています。教観相即の題目を五字七字と称します。五字は七字で、七字は五字であるという意味です。

(六) 本因本果

本因本果は前掲の『開目抄』に説かれています。念のため再度あげます。

一 迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前

迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顯す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。『昭定』五五二頁。

この文は、寿量品の発迹顯本に本門の十界の因果が説き顯わされ、そこに真の十界互具が明らかとなり、無始九界具仏界・無始仏界具九界が成り立つとします。これが本因本果の法門であり真の一念三千です。

このことに関連して『観心本尊抄』には次のようにあります。

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。『昭定』七二一頁。原漢文。

釈尊の本因本果は妙法五字に具足します。これは本法である題目の実体を明示されたものです。信行者が題目を受持すると釈尊の因果の功徳が自然に譲与されます。これは信行者の得益を明かしたものです。題目受持は七字の観、自然譲与は功徳受得の証（証果）となります。この関係を五字七字五字と言います。

前の五字は因果の功徳〓本法、次の七字は信行者の題目受持、後の五字は自然譲与された因果の功徳です。換言すると前の五字は教、次の七字は観、後の五字は証となります。教と観は相即し、観によって証が成り立ちます。

四 日蓮正宗の日蓮本仏論

(一) 日蓮本仏論の意味

日蓮本仏とは日蓮大聖人を本仏として尊崇することです。前述のとおり、日蓮宗では日蓮聖人の教えに基づいて法華経本門寿量品の釈尊を本尊として尊崇し礼拝します。その釈尊は寿量品において始成に即して久遠実成を開顯された仏です。それに対して日蓮正宗では日蓮聖人を久遠元初自受用報身仏と受けとめ末法の本仏とします。

元初とは仏の教化の根元的始まりという意味です。この言葉は天台大師の『法華玄義』や妙楽大師の『法華玄義釈

籤』に見られますが、日蓮聖人の真撰遺文中には見られません。伝日蓮聖人講述とされる『御義口伝』には「元初一念」という言葉が見られます。これは中古天台本覚思想によるものと考えられています。日蓮正宗では久遠実成の仏より以前の本因時の菩薩行を立てます。そこで本因妙の教主として日蓮聖人を位置づけています。前述のとおり、日蓮聖人にはそのようなお考えはありません。日蓮聖人は寿命品の久遠実成の仏に本因本果を見ておられます。

『法華玄義』『法華玄義釈籤』には元初と類似した元始という言葉も見られます。仏の教化の根本的な始まりという意味です。日蓮聖人遺文中には「本門は久遠を元始と為し」（『断簡三四八』『昭定』二九八八頁）とあり、寿命品の久遠実成を元始とされています。

自受用身の仏とは、悟りの境界に法樂しその喜悅のなかにおられる仏を言います。自受用身は他受用身に対する言葉です。他受用身は悟りの功德を他にめぐらす仏です。自受用・他受用は報身仏の功德や力用を示しています。

日蓮正宗では、法華経寿量品で開顕された久遠実成の仏は垂迹仏であり本已有善の衆生のための脱益の仏であるとしています。

このような日蓮本仏論の成立は日蓮聖人滅後百数十年後頃と考えられています。

（二）日蓮本仏論の論拠

日蓮本仏論の論拠となっているのは日興門流の口伝書です。両巻血脈や二箇相承がその代表的なものです。これらは中古天台本覚思想に立脚した口伝法門で、門流の正嫡意識を強く反映したものです。日蓮聖人滅後においては、門流を中心として教団は展開していきました。したがってとみに門流の正統性の強調がはかられていきました。日蓮聖人の墓所輪番の崩壊、日興上人の身延離山、および鎌倉方と富士方の対立である五一相對などがその歴史的背景にあります。なかでも富士方面を中心とした日興門流では盛んに門流の正嫡を強調しました。

1 両巻血脈

両巻血脈とは『本因妙抄』と『百六箇相承事』のことを言います。『本因妙抄』の具名は『法華本門宗血脈相承事』、『百六箇相承事』の具名は『具贍本種正法実義本迹勝劣正伝』と言います。

(1) 他門流不共の秘伝書

これらは他門流不共の秘伝書とされ唯受一人の相承を明かす血脈書です。これによって日興門流唯一の秘伝相承を主張します。

(2) 文献の初出

「両巻血脈」の名称は伝妙蓮寺日眼の『五人所破抄見聞』です。本書は康暦二年（一三八〇）ですので祖滅九九年の成立です。あるいは『五人所破抄見聞』は西山本門寺第八世日眼（一四八六）の書か（『日蓮宗事典』一〇四頁）という説もあります。そうであると成立はさらに時代を下ることになります。

(3) 両巻血脈の相承

要法寺の広蔵院日辰（一五〇八〜一五七六）の写本奥書によると、両巻血脈の相承は日蓮大聖人↓日興上人↓日尊上人↓京都住本寺（日大）へと伝えとあります。このことから日蓮本仏の考え方は室町時代に日尊門流住本寺系の教学として成立したと考えられています。

また、日蓮本仏論は八品派（法華宗本門流）の影響のもとに成立したものとされています。その根拠は日隆の本門八品本因妙下種論に依ります。ただし、八品派は五百塵点の仏を実修実証の報身顕本とするに対し、日蓮正宗は法華経の釈尊を文上塵点有始の迹仏とし、塵点有始に即した無始久遠の顕本を認めません。

両巻血脈に立脚した大石寺教学の確立は江戸中期の堅樹院日寛（一六六五〜一七二六）によります。このことは後述いたします。

①『本因妙抄』（『宗全』第二卷一〇頁。『富士宗学要集』第一卷）

『本因妙抄』には「弘安五年太歳壬午十月十一日」とあります。この撰述年月日については、日蓮聖人の状況を考えると疑問が生じます。日蓮聖人は健康上の問題から弘安五年九月八日に身延山を離れ常陸の湯に向かわれたとされています。武蔵国池上に到着されたのは九月十八日です。十月八日に六老僧を指名して後事を託し、十三日に遷化されました。日蓮聖人の健康状態を勘案すると「弘安五年太歳壬午十月十一日」に筆を執られたとは考えられません。

また『本因妙抄』記載の署名である「本因妙之行者日蓮記之」という表現も不自然です。「本因妙之行者日蓮」という表記は日蓮聖人の真撰遺文中には見られませんし、日蓮聖人の教学には自身を本因妙の行者とする考え方もありません。

本書は真筆が伝来せず、要法寺日辰の写本が現存しています。この写本は日尊本からの写本であると伝えていきます。文献上の初出は伝三位日順（一二九四〜一三五四）の『本因妙抄口決』です。その内容は伝最澄の『三大章疏七面相承口決』（『伝全』第五卷）に準拠したもので、室町時代の中古天台本覚思想の色彩が濃厚です。したがって日蓮聖人の撰述とすることはできません。諸先師の研究によれば、日蓮聖人滅後約百年頃の成立であろうとされています。

要法寺日辰の『開迹顕本法華二論義得意鈔』には、『本因妙抄』で説く本迹論は「御正筆の血脈書を拝せざる間は謀実定め難し」（『宗全』第三卷三七〇頁。原漢文）とあります。

『本因妙抄』の教義内容は種本脱迹の勝劣を立てるものです。釈尊は熟脱の教主であり法華経（本門法華経）は迹にして劣、日蓮大聖人は下種の法主であり題目は本にして勝とします。法華経寿量品の上底に種脱を立て、釈尊の法華経は文上で過去下種にして脱益、日蓮大聖人の法華経は文底の妙法で未下種の衆生への下種とします。文底の妙法は本因妙にして久遠実成の名字即の妙法、日蓮大聖人は久遠名字即位であるとしています。

②『百六箇相承事』（『宗全』第二卷一〇三三頁。『富士宗学要集』第一卷）

『百六箇相承事』には「弘安三年庚辰正月十一日」の日付があります。「本因妙教主本門大師日蓮謹結要之」との署名のもとに「久遠名字已来本因本果之主本地自受用報身垂迹上行菩薩再誕本門大師日蓮詮要」とあります。上述のように日蓮聖人の真撰遺文にはこのような表現は見られません。

『百六箇相承事』は百六箇条の本迹勝劣についての相承を説くもので、脱の本迹勝劣五十一箇条、種の本迹勝劣五十六箇条があげられています。その内容は中古天台本覚思想に依るもので、日蓮聖人滅後の成立と考えられています。教義内容は、久遠名字即の本仏の正法を本種子、久遠名字即の本因妙の正法を末法下種の法華経とします。日蓮大聖人は久遠名字即の正法を末法の今に移すもので、釈迦仏は迹の仏であるとし、その思想系譜は日蓮大聖人から日興上人へという唯受一人の受持血脈相承を主張します。広宣流布の暁には上行等の四大菩薩が同心して六万坊を建立し、いずれのところも多宝富士山本門寺上行院と号すべきである、とあります。

2 二箇相承

二箇相承は『身延相承』と『池上相承』を言い日興門流独特の伝承です。日興門流では「にこそうじょう」と呼称しています。

(1) 成立

二箇相承の成立は日蓮聖人滅後一五〇年頃と考えられています。

(2) 内容

二箇相承の内容は日興唯受一人付属を主張するもので日興の正嫡性を強調しています。すなわち二箇相承は日興門流の正統性を主張するために日蓮聖人に仮託した偽書です。日興唯受一人付属は日蓮聖人の「本弟子六人」の定めとも矛盾しています。

① 『身延相承』

『身延相承』には次のようにあります。

日蓮一期弘法白蓮阿闍梨日興付属之可為本門弘通大導師也。国主被立此法者富士山本門寺戒壇可被建立也。事戒法謂是也。就中我門弟等可守此状也。

弘安五年壬午九月 日

日蓮 在判

血脈次第日蓮日興

『宗全』第二卷三三頁。

このように『身延相承』には、一期の弘法を日興一人に授与したことや、富士山本門寺に戒壇を建立するようにとの付託が記されています。

② 『池上相承』

『池上相承』には次のようにあります。

釈尊五十年説法相承白蓮阿闍梨日興可為身延山久遠寺別当也。背在家出家共輩者可為非法也。

弘安五年壬午十月十三日

武州池上 日蓮 在判

『宗全』第二卷三三頁。

このように『池上相承』には、白蓮阿闍梨日興は身延山久遠寺の別当であるとあります。

(三) 堅樹院日寛の教学

大石寺教学を確立したのは大石寺第二十六世の堅樹院日寛であるとされています。

1 『六卷鈔』

日寛には『六卷鈔』と称される重要書があります。『三重秘伝鈔』『文底秘沈鈔』『依義判文鈔』『末法相応鈔』『当流行事鈔』『当家三衣鈔』です。

2 法華經受容の特色

日寛の法華經受容の特色は、釈尊の法華經は本迹共に迹であり本已有善の機根を調機入熟させるための脱益の法であるとしています。すなわち釈尊の法華經は随他方便説であるとの考えです。これに対して、日蓮大聖人の法華經は本であり本未有善の機根に下種する久遠の妙法であるとします。すなわち日蓮大聖人の法華經は久遠本仏の自内証であり随自意の真実法であるとの考えです。久遠本仏が自行成就のために行じた因行を本因とし、日蓮大聖人の仏法は久遠元初の本因妙の法華經であるとしています。

3 上底相對―種脱勝劣

法華經寿命品の文に上底の相對を立て種脱の勝劣を説きます。寿命文上は在世本門にして脱益であることから劣、寿命文底は末法の觀心にして下種であることから勝とします。末法の觀心は能詮においては内証の寿命品、所詮においては本因下種の妙法五字とします。

4 種脱相對―種勝脱劣

日寛の種脱相對は從來の時機（在末）による相對的勝劣に対して絶対勝劣であることに特色があります。在世本門の教主は脱益の仏（垂迹の仏）にして劣、在世本門の正宗は文上脱益にして劣とします。これに対して末法本門の教主は名字凡身の下種の本仏（日蓮大聖人）にして勝、末法本門の正宗は文底下種妙法にして勝とします。

5 本因下種

日蓮大聖人は本因妙下種の教主（本仏）、久遠元初の自受用報身、本地自受用報身如来の再誕であるとしています。これに対して久遠成道の釈尊は衆生の本種を熟脱せしめる脱仏（垂迹の仏）、本地自受用報身如来（日蓮大聖人）の垂迹、脱益の教主であるとしています。これらの主張は『報恩鈔文段』（『宗全』第四卷三三二頁）、『当流行事鈔』（『宗全』第四卷九八頁）などに見られます。

6 機根

在世の機は本已有善、末法の機は本未有善であるとし、その末法の機は逆縁下種であるとし、

7 教法

在世は脱益の法である寿量文上一品二半で劣、末法は下種の妙法である寿量文底妙法五字で勝であるとし、

8 日蓮本仏

教主は本因妙の教主日蓮大聖人であるとし、文上は本果妙の釈尊で垂迹にして脱益、文底は本因妙の日蓮大聖人で本仏にして下種とします。したがって本仏は久遠元初自受用報身再誕末法下種主師親本因妙教主大慈大悲之日蓮大聖人です。日蓮大聖人は本門寿量文底久遠元初自受用報身名字凡夫当体本因妙教主釈尊、文底下種の本仏、事一念三千の本尊、一念三千自受用身です。大曼荼羅（一念三千）は久遠元初自受用身の日蓮大聖人であるとし、

9 人法本尊

(1) 人本尊

人本尊は日蓮大聖人です。日蓮大聖人は主師親三徳具備、久遠元初の自受用報身、末法下種の教主、本因妙の教主、本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕、一念三千即自受用身の仏です。本尊は法即人です。これらの主張は『観心本尊鈔文段』（『宗全』第四卷一八九頁）、『当流行事鈔』（『宗全』第四卷一〇〇・一一三頁）、『文底秘沈鈔』（『宗全』第四卷二六頁）などに見られます。

(2) 法本尊

法本尊は自受用身即一念三千の大曼荼羅で、弘安二年、弥四郎国重に授与の大曼荼羅（楠の板本尊）です。本尊は人即法です。これらの主張は『末法相応鈔』（『宗全』第四卷八三頁）、『観心本尊鈔文段』（『宗全』第四卷一八九頁）などに見られます。

(3) 人法体一

本尊は文字で表すと大曼荼羅、木画で造立すると日蓮大聖人となります。ただし祖師像以外の仏像造立は不可とされています。これらの主張については『観心本尊鈔文段』（『宗全』第四卷二二〇頁）等に見られます。

五 むすび

日蓮本仏論の特色は宗祖本仏の実体視であり、このことは仏教信仰の本末転倒です。仏教は、もとより仏陀釈尊を主体とした教えです。末法時においては利益がないとして仏陀釈尊を下すことは仏陀釈尊を冒瀆するものです。このことは仏教にあらざる考え方を仏教の名のもとに主張することであり、仏教の思想・歴史・文化をご都合主義に基づいて改変するものです。このような考え方は日蓮聖人にはありません。当然、日興上人にもありません。日蓮聖人や日興上人の名において日蓮本仏論を立てることは、日蓮聖人や日興上人をも冒瀆することになります。

日蓮本仏論という独特の主張は自門流の正統性、自教団の正統性を誇示するための教条性に満ちた考え方です。

日蓮聖人に対する悪しき人格化・絶対化は日蓮聖人についての誤解を招きます。また、日蓮聖人の教えに生きようとする者に対し、世間の人々に間違った印象を与えることにもなります。

付記

本稿は平成二十九年九月十三日開催の第五十回中央教化研究会議の基調講演に加筆したものです。

第五十回中央教化研究会議

平成二十九年九月十三日

日蓮聖人の仏陀観と日蓮正宗の日蓮本仏論

庵谷 行亨
おおたに ぎょうこう

一、はじめに

二、宗学の意義

(一) 宗学の本質

宗祖の教えに帰入し、信仰を通して正しい人生を歩む

(二) 人間と宗学

宗祖の教えに本来の自分を知り、自己を実現する

(三) 社会と宗学

宗祖の教えに、生きることの意義を知り、社会的使命を全うする

三、日蓮聖人の仏陀観

(一) 本門の教主釈尊

1、発迹顕本の仏

①『開目抄』

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。『昭定』五五二頁。

②『御衣並単衣御書』

此仏は再生敗種を心腑とし、顕本遠寿其寿とし、常住仏性を咽喉とし、一乗妙行を眼目とせる仏なり。『昭定』一一一頁。

③『諫曉八幡抄』

日本六十六箇国二の島、一万一千三十七の寺寺の仏は皆或は画像或は木像、或は真言已前の寺もあり、或は已後の寺もあり。此等の仏は皆法華経より出生せり。法華経をもつて眼とすべし。所謂、此方等経是諸仏眼等〔云云〕。妙楽云然此経以常住仏性を咽喉以一乗妙行為眼目以再生敗種為心腑以顕本遠寿為其命等〔云云〕。『昭定』一八四一頁。

2、仏の三身顕本

①『開目抄』

本門十四品も涌出・寿量の二品を除ては皆始成を存せり。双林最後大般涅槃経四十卷・其外の法華前後の諸大乘経に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども心身報身の顕本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃

等の諸大乘経をばすて、但涌出・寿量の二品には付べき。『昭定』五五三頁。

* 三身即一正在報身

3、三身円満の古仏

① 『開目抄』

大日経・金剛頂経等の八葉九尊・三十七尊等、大日如来の化身とわみゆれども、其化身、三身円満の古仏にあらず。大品経の千仏・阿弥陀経の六方諸仏、いまだ来集の仏にあらず。大集経の来集の仏、又分身ならず。金光明経の四方四仏化身なり。総て一切経の中に各修各行の三身円満の諸仏を集て我分身とわとかれず。これ寿量品の遠序なり。『昭定』五七一〜五七二頁。

4、所顕三身無始の古仏

① 『観心本尊抄』

寿量品云然我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等「云云」。我等己心釈尊五百塵点乃至所顕三身無始古仏也。

『昭定』七一二頁。

5、寿量品の仏

① 『開目抄』

華嚴経の台上十方・阿含経の小釈迦、方等・般若の、金光明経の、阿弥陀経の、大日経等の権仏等は、此寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の学者等近は自宗に迷、遠は法華経の寿量品をしらず、水中の月に実月の想をなし、或は入て取んとをもひ或は繩をつけてつなぎとどめんとす。天台云不識天月但観池月等

「云云」。『昭定』五五二頁。

② 『開目抄』

妙樂云一代教中未曾顯遠父母之寿。○若不知父寿之遠復迷父統之邦。徒謂才能全非人子等「云云」。妙樂大師は唐の末天寶年中の者也。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗、並に依経を深み、広勘て、寿量品の仏をしらざる者父統の邦に迷る才能ある畜生とかけるなり。『昭定』五七八頁。

③『断簡新加』二二二一

答云月支・漢土・日本国の二千二百三十余年が間の寺塔を見るに、いまだ寿量品の仏を造立せる伽藍なし、清舎なし。『昭定』二九三八頁。

6、本門の教主釈尊

①『観心本尊抄』

此時地涌千界出現本門釈尊為脇士一閻浮提第一本尊可立此国。『昭定』七二〇頁。

②『報恩抄』

一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。『昭定』一二四八頁。

7、本門の本尊

①『観心本尊抄』

像法中末観音薬王示現南岳天台等出現以迹門為面以本門為裏百界千如一念三千尽其義。但論理具事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊未広行之。所詮有円機無円時故也。『昭定』七一九頁。

②『顕仏未來記』

此人得守護之力以本門本尊・妙法蓮華經五字令広宣流布於閻浮提歟。例如威音王仏像法之時不輕菩薩以我深敬等二十四字広宣流布於彼土招一国杖木等大難也。彼二十四字与此五字其語雖殊其意同之。彼像法末与是末法初全同。

彼不輕菩薩初随喜人日蓮名字凡夫也。『昭定』七三九頁。

③ 『法華行者值難事』

天台・伝教宣之本門本尊与四菩薩戒壇南無妙法蓮華經五字残之。所詮一仏不授与故二時機未熟故也。『昭定』七九八頁。

④ 『法華取要抄』

問云如来滅後二千余年龍樹・天親・天台・伝教所残秘法何物乎。答曰本門本尊与戒壇与題目五字也。『昭定』八一五頁。

8、本門寿量品の本尊

① 『観心本尊抄』

本門寿量品本尊並四大菩薩三國王臣俱未崇重之由申之。此事粗雖聞之前代未聞故驚動耳目迷惑心意。『昭定』七一三頁。

(二) 『開目抄』の相對（『昭定』五三九頁）

五重相對の第五重―教觀相對

「一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。」

本門の教相―本門寿量品の文上の経説（一品二半・寿量品）

本門の観心―本門寿量品の文底の経意（内証の寿量品・題目五字七字）

教觀不二

(三) 『観心本尊抄』の三段（『昭定』七一四頁）

四種三段（五重三段）の第五重―本法三段

「また本門において序・正・流通あり。過去大通仏の法華経より、乃至現在の華嚴経、乃至迹門十四品、涅槃経等の一代五十余年の諸経、十方三世の諸仏の微塵の経々は、皆寿量の序分なり。」（原漢文）

十方三世諸仏微塵の経々―序分

寿量（二品二半・妙法五字）―正宗分

（南無妙法蓮華経）―流通分

種脱対判―在末相望

末法の大法（題目五字七字）を詮顯するための対判

『観心本尊抄』（『昭定』七一五頁）

「本門は序・正・流通ともに末法の始を以て詮となす。在世の本門と末法の初は、一同に純円なり。ただし彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり。」（原漢文）

在世本門―一品二半―脱益

末法の初―題目五字―下種

在末は一同に純円

（四）末法の種脱

末法（時）―題目五字七字―下種―得益（久遠釈尊の因果）

題目五字（教法）―仏種―本因本果 寿量品の肝心 要法 良葉 宝珠

題目七字（観心）―下種―信行 唱題 受持 立正 色説

種脱一雙

下種即脱益―受持即讓与

(五) 教観相即

教―題目五字―即観の教

観―題目七字―即教の観

教観相即―題目五字七字

(六) 本因本果

『開目抄』(『昭定』五五二頁)

「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。」

発迹顕本―本門の十界の因果

真の十界互具―無始九界具仏界・無始仏界具九界

真の一念三千―本因本果

『観心本尊抄』(『昭定』七一頁)

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す。我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。」(原漢文)

本仏―本因本果

本法―妙法五字―教

行者―題目受持―観

得益―因果の功德の自然譲与―証

四、日蓮正宗の日蓮本仏論

(一) 日蓮本仏論の意味

日蓮大聖人を本仏として尊崇

久遠元初自受用報身仏

末法の本仏

法華經寿命品で開顕された久遠実成の仏

垂迹仏

在世衆生のための脱益の仏

日蓮本仏論の成立

日蓮聖人滅後百数十年後頃

(二) 日蓮本仏論の論拠

日興門流の口伝書

中古天台本覚思想

門流の正嫡意識

門流の正統性の強調

門流を基盤とした教団の展開

日興上人の身延離山

五一相対

1、両巻血脈

『本因妙抄』（『法華本門宗血脈相承事』）

『百六箇相承事』（『具贍本種正法実義本迹勝劣正伝』）

(1) 他門流不共の秘伝書

唯受一人の相承を明かす血脈秘書

日興門流独一の秘伝相承

(2) 文献の初出

「両巻血脈」の名称

伝妙蓮寺日眼『五人所破抄見聞』康暦二年（一三八〇）。

祖滅九九年

*『五人所破抄見聞』は西山本門寺第八世日眼（一四八六）の書か（『日蓮宗事典』一〇四頁）

(3) 両巻血脈の相承

要法寺の広蔵院日辰（一五〇八〜一五七六）の写本奥書によると

日蓮大聖人↓日興上人↓日尊上人⇨京都住本寺（日大）へと伝える

室町時代に日尊門流住本寺系の教学として成立したと考えられる

*八品派の影響のもとに成立したものとされる

本門八品本因妙下種

ただし、八品派は五百塵点の仏を実修実証の報身顕本とする

日蓮正宗は法華経の釈尊を文上塵点有始の迹仏とし、塵点有始に即した無始久遠の顕本を認めない

両巻血脈に立脚した大石寺教学の確立は江戸中期の堅樹院日寛（一六六五～一七二六）による

①『本因妙抄』（『宗全』第二卷）『富士宗学要集』（第一卷）

「弘安五年太歳壬午十月十一日」

* 撰述年月日の疑問…日蓮聖人の健康状態・十月八日六老僧指名、十三日遷化

「本因妙の行者日蓮記之」

真筆不現存

要法寺日辰の写本現存

日尊本の写本と伝える

文献上の初出

伝三位日順（一二九四～一三五四）の『本因妙抄口決』

伝最澄『三大章疏七面相承口決』（『伝全』第五卷）に準拠した偽作書

室町時代の中古天台本覚思想の色彩が濃厚

日蓮聖人滅後約百年頃の成立か

要法寺日辰の『開迹顕本法華二論義得意鈔』には、『本因妙抄』で説く本迹論は「御正筆の血脈書を拝せざる間は謀実定め難し」（『宗全』第三卷三七〇頁。原漢文）とある

教義内容

種本脱迹の勝劣を立てる

釈尊（熟脱の教主）―法華経（本門法華経）―迹―劣

日蓮大聖人（下種の法主）―題目―本―勝

上底の種脱を立てる

釈尊の法華経―文上―過去下種の脱益

日蓮大聖人の法華経―文底の妙法―未下種の衆生への下種

文底の妙法

本因妙―久遠実成の名字即の妙法

日蓮大聖人

久遠名字即位の身

② 『百六箇相承事』（『宗全』第二卷 『富士宗学要集』第一卷）

「弘安三年庚辰正月十一日」

「久遠名字已来本因本果之主本地自受用報身垂迹上行菩薩再誕本門大師日蓮詮要」

「本因妙教主本門大師日蓮謹結要之」

百六箇条の本迹勝劣についての相承

脱の本迹勝劣五十一箇条

種の本迹勝劣五十六箇条

中古天台本覚思想

日蓮聖人滅後の成立

教義内容

久遠名字即の本仏の正法―本種子

久遠名字即の本因妙の正法―末法下種の法華経

日蓮大聖人―久遠名字即の正法を末法の今に移す

釈迦仏―迹の仏

唯受一人の受持血脈相承

日蓮大聖人↓日興上人

広宣流布の暁

上行等の四菩薩が出現して六万坊を建立

多宝富士山本門寺上行院

2、二箇相承

日興門流の伝承

日興門流では「にこそうじょう」と呼称

『身延相承』

『池上相承』

(1) 成立

日蓮聖人滅後一五〇年頃

(2) 内容

日興唯受一人付属

日興の正嫡性を主張

日興門流の正統性を主張するために日蓮聖人に仮託した偽書

日興唯受一人付属は「本弟子六人」の制とも矛盾する

① 『身延相承』

『宗全』 第二卷三三三頁

弘安五年九月 日

日蓮聖人が「二期の弘法を日興一人に授与し、富士山本門寺に戒壇を建立することを託す」

② 『池上相承』

『宗全』 第二卷三三三頁

弘安五年十月十三日

日蓮聖人が「日興は身延山久遠寺の別当である」とする

(三) 堅樹院日寛の教学

大石寺第二十六世

大石寺教学の確立

1、 『六卷鈔』

『三重秘伝鈔』 『文底秘沈鈔』 『依義判文鈔』 『末法相応鈔』 『当流行事鈔』 『当家二衣鈔』

2、 法華經受容の特色

积尊の法華經―本迹共に迹

本已有善の機根を調機入熟させるための脱益の法―随他方便説

日蓮大聖人の法華経―本

本未有善の機根に下種する久遠の妙法―久遠本仏の内証（随意の法）

久遠本仏が自行成就のために行じた因行―本因

久遠元初の本因妙の法華経

3、上底相對―種脱勝劣

寿量文上―在世本門―脱益―劣

寿量文底―末法の観心―下種―勝

末法の観心

能詮―内証の寿量品

所詮―本因下種の妙法五字

4、種脱相對―種勝脱劣

*従来は、時機（在末）による相対的勝劣であったが、これを本質的に絶対勝劣であるとする

在世本門の教主―脱益の仏（垂迹の仏）―劣

在世本門の正宗―文上脱益―劣

末法本門の教主―名字凡身の下種の本仏（日蓮大聖人）―勝

末法本門の正宗―文底下種 of 妙法―勝

5、本因下種

日蓮大聖人

本因妙下種の教主（本仏）

久遠元初の自受用報身

本地自受用報身如來の再誕

久遠成道の積尊

衆生の本種を熟脱せしめる脱仏（垂迹の仏）

本果妙の積尊は脱益の教主

本地自受用報身如來（日蓮大聖人）の垂迹

*『報恩鈔文段』（『宗全』第四卷三二二頁）

『当流行事鈔』（『宗全』第四卷九八頁）

6、 機根

在世の機—本已有善

末法の機—本未有善・逆縁下種

7、 教法

在世—脱益の法—寿量文上一品二半—劣

末法—下種の妙法—寿量文底妙法五字—勝

8、 日蓮本仏

教主—本因妙の教主日蓮

文上—本果妙—積尊—垂迹—脱益

文底—本因妙—日蓮—本仏—下種

日蓮大聖人

久遠元初自受用報身再誕末法下種主師親本因妙教主大慈大悲之日蓮大聖人

本門寿量文底久遠元初自受用報身名字凡夫当体本因妙教主积尊

文底下種本仏

事一念三千の本尊

一念三千自受用身

大曼荼羅（一念三千） 〓 日蓮大聖人（久遠元初自受用身）

9、人法本尊

(1) 人本尊

日蓮大聖人

主師親三德具備

久遠元初の自受用報身

末法下種の教主

本因妙の教主

本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕

一念三千即自受用身蓮祖大聖人

法即人の本尊

*『観心本尊鈔文段』（『宗全』第四卷一八九頁）

『当流行事鈔』（『宗全』第四卷一〇〇・一一三頁）

『文底秘沈鈔』（『宗全』第四卷二六頁）

(2) 法本尊

自受用身即一念三千の大曼荼羅

弘安二年、弥四郎国重授与大曼荼羅(楠の板本尊)

人即法の本尊

*『末法相応鈔』(『宗全』第四卷八三頁)

『観心本尊鈔文段』(『宗全』第四卷一八九頁)

(3) 人法体一

文字で表すとー大曼荼羅

木画で造立するとー日蓮大聖人

ただし祖師像以外の仏像造立は不可

*『観心本尊鈔文段』(『宗全』第四卷二二〇頁)

五、むすび

日蓮本仏論の特色

仏教信仰の本末転倒

宗祖本仏の実体視

嫡々相承の正統性

自門流の正統性

自教団の正統性

教条性

本因妙下種の教主としての尊厳性

歴史上の人物である日蓮聖人を本仏として神格化・絶対化

個人崇拜

教団指導者の絶対性